

選手マネジメントがクラブ経営に与える影響について —Jリーグとプレミアリーグの比較から—

About the influence that the player management gives club management

1K05B027

指導教員

主査 堀野博幸先生

薄井 裕太郎

副査 倉石平先生

1. 序論

アジアサッカー連盟 (Asian Football Confederation; 以下AFC) 主催の AFC チャンピオンズリーグ (AFC Champions League; 以下ACL) の発展に伴いJリーグではヨーロッパのサッカースケジュールを参考にした改革が進む中で、公式試合数が増加する傾向にある。こうした傾向に対応するためにはフィールド上で繰り広げられる事象以外に、長いシーズンを戦い抜くための選手起用法を主としたチーム戦略に関するデータの蓄積が求められる。それらのチーム戦略にそった選手獲得などを行うことにより安定したクラブ経営戦略にもつながると考えられる。

本研究では、イングランドプレミアリーグなどの欧州ビッグクラブを参考に、Jリーグの上位クラブ (ACL出場経験チーム) の選手起用法を中心としたチーム戦略を分析し、安定したクラブ経営ができるチーム戦略モデルを検討する。そしてJリーグにおける競技の国際化に対応し、選手マネジメントがクラブ経営に与える影響を示すことを主な目的とする。

2. 方法

1). 対象

先行研究 (堀野、2008) の分析方法を参考に以下のように出場選手の傾向を分析する。

ACLが現行の大会方式になった 2004 から 2007 シーズンの 4 シーズンにおいてJ1 に在籍し、ACLに出場した実績を持つ有力クラブ (浦和レッズ、ガンバ大阪、横浜FM、ジュビロ磐田) を対象

とした。

比較対象群として、Jリーグに上記 4 シーズン在籍し、AFCの主催大会に出場していない2クラブ (アルビレックス新潟、名古屋グランパス) を選定した。次に、対象としたクラブ所属選手について、試合出場記録をもとに、各大会の出場記録集計を行った。

2). 分析方法

本研究では、各試合における先発出場および途中出場を試合出場と定義し、各試合の出場選手を集計した。各クラブの出場データは、Jリーグ全 34 試合 (04 シーズンは 30 試合) における出場試合数により出場選手を 5 つのカテゴリーに分類し、ほかの大会の出場状況を集計した。次に、各大会の出場試合割合として、上記 5 つのカテゴリー内の選手ごとに、「各カテゴリーに分類された選手について、のべ出場試合総数を同カテゴリー選手の試合出場機会総数で除した値」を算出した。

3. 結果

Jリーグの有力クラブでは戦力として平均 27 名程度の選手で年間平均 50 試合戦っていた。また有力クラブ以外のクラブでは平均 28 名程度で年間平均 40 試合戦っていた。有力クラブ群と比較対象群の年間平均試合数は 10 試合程度の開きがあったが、平均起用選手数はほぼ同数であった。つまりJリーグ有力クラブにおいては、欧州の有力クラブに見られるような、30 名以上の選手をローテーションする方式は確認できなかった。しか

し近年の傾向としてACLのプライオリティ上昇とそれに伴う出場選手傾向の変化は確認された。

4. 考察

Jリーグの有力クラブでは 06 シーズン以降JリーグとACLにおける選手起用の類似が認められた。しかし、05 シーズン以前は必ずしもJリーグとACLの選手起用の類似は認められなかった。これは、05 シーズン以前はCWCが開設される前であったため、また賞金総額が低いなどの理由でJリーグの有力クラブにとってACLでの成績にメリットがなかったことが、クラブ戦略においてACLのプライオリティを下げていた原因の一つに考えられる。

5. 結語

本研究結果から、近年のJリーグの有力クラブでは、選手起用による一貫したチーム戦略は見受けられなかった。しかし大会のプライオリティ評価が、大会毎の出場選手傾向に影響を与えており、選手起用戦略に反映されることが示唆された。ただ大会のプライオリティ評価は一定ではなく、クラブのシーズン戦略、もしくはクラブの状況によって変化する。今後Jリーグのクラブは競技力を向上させる「チーム戦略」と、ファンに最高のコンテンツを提供するクラブ経営戦略の充実が求められるだろう。